

稲ホールクロップサイレージによる耕畜連携の取組推進 ～専用品種の導入推進と作期分散による安定生産体制の構築～

1 活動のねらいと背景

佐倉市では、農家の高齢化に伴い、担い手農家への農地集積が加速しています。このような中、水稻農家では、米価の低迷に加え、栽培面積の増加に伴う田植え・収穫作業の集中が課題となっています。また、市内には酪農・肉用牛経営が点在しており、近年の輸入飼料価格高騰を背景に粗飼料の安定供給が求められています。そこで、水稻農家における作期分散による作業負担軽減と、畜産農家の粗飼料確保を同時に図る取組として、稲ホールクロップサイレージ（稲発酵粗飼料、以下「稲WC S」とする）の生産・利用拡大を推進しました。



汎用型飼料収穫機による収穫

2 普及活動の経過

（1）稲WC S 作付け導入に向けた情報提供

市内水稻農家に対し、稲WC S 作付けによる10 a 当たりの収入確保や労働時間削減効果を示し、経営所得安定対策事業による稲WC S の取組を巡回指導により周知しました。

（2）専用品種の選定と生育調査

主食用米の収穫と競合しない作期確保を目的に、早生で収穫適期が早い「たちはやて」、消化性の高い早生の茎葉型専用品種「つきはやか」、酪農家の要望が多く収穫適期が長い「たちすずか」（乾田直は）



左：つきはやか出芽率調査



右：たちはやて草丈調査

（乾田直は）（乾田直は）

を選定し、それぞれの生育特性を把握するため、生育調査を行いました。生育調査や品質評価の結果は関係者間で共有し、次年度作に向けた課題整理や品種選定、技術情報の提供を行い、作付け推進を図りました。

（3）関係者による現地確認と情報共有

佐倉市役所・畜産農家・水稻農家・収穫作業受託組織・改良普及課の関係者が参集し、稲WC S で使用可能な農薬や雑草防除体系についての説明、稲WC S は場巡回を実施しました。生育や雑草の発生状況、収穫時期等を確認し、得られた課題や留意点を意見交換会の場で情報共有し、今後の栽培管理や収穫作業の進め方に関する共通認識を図りました。

3 活動による変化と動き

（1）取組規模の拡大・専用品種への転換

佐倉市内の稲WC S 栽培面積は、平成26年の4 haから令和元年に91ha、令和6年には126haまで拡大したものの、米価高騰の影響を受け令和7年は105haまで減少しました（図1）。

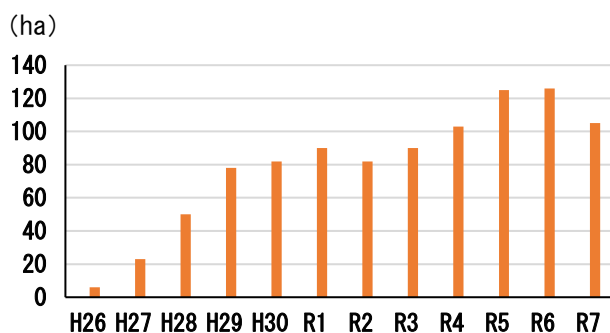


図1 佐倉市の稲WCS作付面積の推移 (ha)

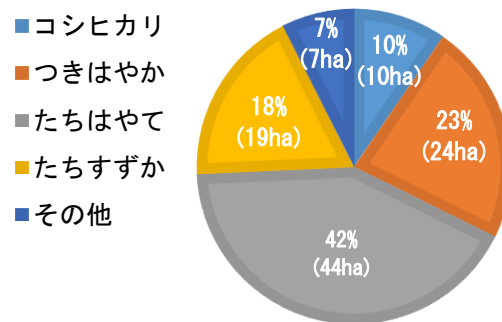


図2 佐倉市のR7年稲WCS品種別栽培面積割合

稲WCS専用品種の作付割合は、平成28年の約10%から令和7年に83%へ上昇しました(図2)。特に「たちはやて」は令和元年の5haから令和7年には44haへ拡大し、「つきはやか」とともに早生品種が中心となりました。また、近年では晩生品種の「たちすずか」の作付面積も拡大しています。

参画する稲WCS生産者は、平成26年の1戸から令和7年に約40戸へ増加し、コントラクターは1組織から5組織へ拡大しました。

(2) 経営・地域への効果

水稻農家側では、夏期の省力管理が可能となり経営規模の拡大につながるとともに、乾田直はや団地化等による作業効率化が進展しました。

畜産農家側では、地域内調達による飼料コスト低減に加え、耕畜の相互理解が進み、土づくりを目的とした堆肥散布が拡大するなど、地域内循環の動きが強まりました。

「つきはやか」は、主食用米の収穫作業前に刈れることから水稻農家の作付け拡大の意向が強く、種子の粒径が播種機に適しているため作業性の高い品種として評価されました。「たちはやて」は、耐倒伏性に優れ、秋口まで収穫を待てる点が作期分散に有効とされました。「たちすずか」は、耐倒伏性に優れ、主食用米の刈り取り後に収穫ができることに加えて、高い収量を確保できることから、作期分散と収量確保の両立が可能な品種として評価されました。

4 今後の課題と活動

稲WCSの取組が進む中で、収穫作業の集中による作業負担の増大が課題となっています。特に、早生品種への作付が集中する傾向にあるため、今後は作業体系に応じた適正品種の検討を進めるとともに、晩生品種の作付拡大や「たちあやか」など中・晩生品種の導入を支援していきます。併せて、作期分散や労働負担軽減の観点から、品種特性や作業体系に関する技術情報の整理・提供を行います。

また、水稻農家は作業が集中する春作業の軽減が求められています。稲WCSでは乾田直はを中心とした作業体系が主流ですが、天候条件により播種適期を逃した場合には移植栽培に切り替えて対応しています。そのため、今後は乾田直はと移植栽培を組み合わせた作業体系の確立を図るとともに、高密度播種苗等の省力化技術について、現地実証等を通じた普及を進め、作業効率の向上を図ります。

5 担当グループ名 中部グループ